

il y a と avoir
— 語用論分析の試み —

藤 田 康 子

はじめに

il y a 文⁽¹⁾と avoir 文は統語構造も意味構造も異なる言語形式であるが、(1)-(4)のように言語外世界の近似的な事態に対応することがある。

(1) (Le professeur à ses élèves:)

a. Y a-t-il des questions?

b. Avez-vous des questions?

(2) (À la maison, entre enfants:)

a. Qu'est-ce qu'il y a comme dessert?

b. Qu'est-ce qu'on a comme dessert?

(3) (Le père à sa fille:)

a. Il y a un invité ce soir.

b. J'ai un invité ce soir.

(4) (Entre participants d'une conférence:)

a. Entre la clôture de la session et l'ouverture du cocktail,
il y a une demi-heure.

b. Entre la clôture de la session et l'ouverture du cocktail,
nous avons une demi-heure.

このように、文文法レベルでは異なる il y a 文と avoir 文は、談話文法レベルで近接した価値を示すことがある。このとき $\langle X \text{ avoir } Y \rangle$ と $\langle \text{il y a } Y \rangle$ という図式が成り立つ。どちらの場合も X が事態に関与しているはずであるが、il y a 文では X が言語化されない。したがって、二つの言語形式は近似的な価値をもつ場合でも、事態のとらえ方が異なると思われる。

また、il y a 文の中には (5)-(7) のように avoir 文に交替させにくいものもある⁽²⁾。

(5) Il n'y a que nous pour organiser la fête.

(6) Il y a des enfants dans le parc.

(7) Il y a des centaines de chaumières dans le nord de Kyoto.

こうした il y a 文は、何らかの X を想定して avoir 文に交替させようとしても、意味がかなり異なってしまう。

このように、il y a 文と avoir 文は、談話的に近似的な価値をもつこともあるが、本質的には異なる言語形式である。異なる言語形式が近似的な価値をもちうるのはなぜか？二つの言語形式は事態のとらえ方（認知構造）がどのように異なるのか？本稿では、このような問題について語用論的観点および認知言語学的観点から分析を試みたい。

1. 考察のポイント

二つの言語形式の差異を考察するため、本稿では次のような点について分析する。

1. 発話者の意識と構文の選択

1) X と Y の関係、発話者の意識：Y が X の身体の一部である、あるいは X と Y が 友人または血縁などの相関関係にあるなど、Y の存在が X から切り離して認識しにくいときは、avoir が選択されやすいのではないかとそれとも、X と Y の関係のあり方にかかわらず、発話者が X と Y をどうとらえるかによって構文は選択されるか？また、il y a 文と avoir 文の意味効果はどのように異なるか？

2) 文脈・発話状況：X が言語化されないのに il y a Y 文が X avoir Y 文と近似的な価値をもつことができるのはなぜか？文脈・発話状況から X が推測できるとき、いつでも il y a Y 文を用いることができるか？

2. 認知構造：il y a 文はいつも X が推測できるわけではない。むしろ、X が想定されているとは考えにくいことが多い。では、il y a 文の本来の機能はどのようなものか？文脈・発話状況の限定されない孤立文では容認されない

発話が、一定の限定を加えると容認できるようになるのはなぜか？このような限定が加わることにより、発話者と共発話者の共有する認識空間はどう変わるか？ avoir 文では認識空間はどのように構築されるか？

2. 発話者の意識と構文の選択

X avoir Y 文では、Y が X との関係において記述される。一方、il y a Y 文では、X は言語化されず、Y のみが言語化される。では、どちらの言語形式を選択するかはどのように決まるのか？異なるにもかかわらず、近似的な価値をもちうるのはなぜか？

2.1 X と Y に対する発話者の意識

まず、構文の選択は X と Y の関係のあり方によるのではないかという予測を立てることができる。Y が X の一部である、あるいは X と Y が相関関係にあるなど、Y の存在が X から切り離して認識しにくいときは、avoir が選択されやすいのではないか？

Y が X の身体の一部、たとえば頭髮である場合について考えよう。Y は X 以外の頭髮にはなりえず、X と緊密かつ恒常的な関係をもつ。このようなとき、X を言語化せず Y のみに言及するのは不自然なのではないかと思われる。果たしてそうなのだろうか⁽³⁾？

(8) a. *Il y a des cheveux blonds.

b. J'ai des cheveux blonds.

(8a) は、ある人の生えている状態の髪を記述する発話としては一般に不適切である。(8b) のように人を主題とし、その髪について叙述する形をとるのがふつうである⁽⁴⁾。(9a) も (9b) と比べると容認度が落ちる。

(9) (En se regardant dans le miroir, le locuteur se peigne:)

a. ?Regarde. Il y a des cheveux blancs.

b. Regarde. J'ai des cheveux blancs.

ところが、インフォーマントによって差があるとはいえ、(9a) は (8a) に比べると容認度がよいとされる傾向がみられる。(10a, b) では (9a) よりさらに

容認度が上がり、問題なく容認できるとするインフォーマントもあった。

(10) a. (?)Regarde mes cheveux. Ils sont très abimés et il y a des cheveux blancs aussi.

b. (?)Je suis plutôt blonde. Mais quand on regarde bien, il y a des cheveux bruns.

(9)-(10)では、《Regarde》のように発話者の視線が一点に集中していることを表すような語句を補うと、容認度がよくなった。YがXと恒常的な関係にあっても、発話者がことさらYに意識を集中させるならば、il y a Y文を用いることができるのではないだろうか？

そこで、発話者がXではなくYに意識を集中させるような文脈を想定し、容認度を調べてみた。

(11) (Un professeur de l'école de coiffure devant ses élèves, en montrant une photo:)

Regardez ces cheveux. Ils sont très abimés et il y a des cheveux blancs aussi. Pour les soigner, vous mettez...

(11)はすべてのインフォーマントに問題なく容認された。発話者はX(写真の人物)には関心がなく、Y(髪)に注目している。(12)はあるインフォーマントによる作例である⁽⁵⁾。

(12) Elle a de beaux cheveux. Ils sont blonds et si on regarde de près, il y a des boucles toutes dorées.

次はほくろの例であるが、ほくろは身体から独立して存在しえない。それだけに頭髮以上にXとの関係が緊密なものとして認識されると思われる。

(13) (En regardant le visage de son interlocuteur:)

a. ??Il y a un grain de beauté.

b. Tu as un grain de beauté.

(13)では発話状況を限定したので、(8a)に比べると(13a)は容認度がややよくなっている。しかし、頭髮同様、ほくろをXから切り離して記述するのは、特別な文脈がない限り不自然であるという結果に変わりはない。

そこで、発話者の意識を身体の一部に集中させるような文脈を与え、比較してみた。

(14) (En se regardant dans le miroir:)

a. (?)Regarde. Il y a un grain de beauté.

b. Regarde mon visage. Il y a des taches de rousseur et un gros grain de beauté.

(14) は視線を焦中させるような語句を補った発話であるが、(13a) より容認度が高くなった。(14a) と (14b) では、より焦点が絞られている (14b) のほうが安定した⁽⁶⁾。

これらの発話より、X と Y の関係が緊密であるかどうかは、構文選択の直接の原因ではないことがわかる。構文の選択は、主として発話者が Y を X との関係においてとらえるか、Y に意識を集中させるかに動機づけられると考えられる。

2.2 意味効果

(11), (13a) のように *il y a* を用いると、人を物扱いするような意味効果があるという指摘が度々あった。そこで、次のような二つの発話状況を設定し、比べてみた⁽⁷⁾。

(15) (En regardant la photo d'une amie:)

a. Tiens! Elle a un grain de beauté à côté du nez.

b. (?)Tiens! Il y a un grain de beauté à côté du nez.

(16) (Un policier, en regardant la photo d'une criminelle:)

a. Tu as remarqué? Elle a un grain de beauté à côté du nez.

b. Tu as remarqué? Il y a un grain de beauté à côté du nez.

その結果、友人の写真では *il y a* に対して抵抗が感じられるが、犯人の写真では抵抗感はかなり弱まることがわかった。人の写真を見るとき、通常は一人の人間の像として全体的に認識するのであって、髪やほくろなどをばらばらに認識するのではない。いわば髪やほくろは人を中心として二次的に認識される可言えよう。*avoir* を用いた (15a), (16a) はこのような認識のしかたに対応していると思われる。一方、髪やほくろに意識を集中させると、人よりも髪やほくろが重要視されることになる。すなわち、写真の人物は人格をもった主体としてではなく、その一部が物として客観的、即物的に認識されることになる。

il y a を用いた (15b), (16b) は、発話者が Y に意識を集中させるということが X に対する認識を即物的なものにするという副次的結果を伴った例であると言えよう。友人の写真ではまず人としての認識が先行するが、犯人の写真なら即物的なとらえ方が容易になるので容認度が上がるわけである⁽⁸⁾。このように、Y が X の身体の一部である場合に il y a を選択すると、発話者が X を無視し、Y を物として扱うような意味効果が生じることがある。

2.3 文脈・発話状況への依存

次に、X が言語化されないのに il y a Y 文が X avoir Y 文と近似的な価値をもちうるのはなぜかについて考察する。Y が X の友人である場合を例に考えてみよう。Y が ami という語で表されるとき、一般に Y は X との関係において友人なのであって、X から切り離されて友人と認識されることはない。この意味で X の存在は必ず認識される。しかし、Y に意識を集中させるならば il y a un(e) ami(e) という構造をもつ発話が成立する。

(17) a. *Il y a une amie à Paris.

b. J'ai une amie à Paris.

(18) (L'interlocuteur veut faire du cinéma:)

a. Il y a une amie cinéaste à Paris. Elle pourra peut-être t'aider.

b. J'ai une amie cinéaste à Paris. Elle pourra peut-être t'aider.

(18a) はあるインフォーマントによって容認された発話である。誰の友人であるかが伝わらなければ、この発話は意味をなさない。しかし、それが誰であるかは言語化されていない。にもかかわらず (18b) と近似的な価値をもつのは、文脈・発話状況から X が容易に推測できるからである。ここでは肯定文中で発話者が Y を amie として提示しているので発話者の友人であると推測できる。(18a) と (18b) は等価であるというわけではない。(18b) ではなく (18a) を選択するときは、X と Y の関係よりも、Y の存在を重視しているのだと考えられる。

二つの言語形式が近似的な価値をもつのは、文脈・発話状況から X が推測

可能になるときである。

2.4 X に対する発話者の意識が構文選択に与える影響

このように、文脈・発話状況に依存することにより成立する *il y a* 文は多い。(1a)-(4a)でも、誰の質問か、誰のデザートか、誰の客か、誰の時間かは発話状況から明らかであった⁽⁹⁾。では、X が推測できるならば、いつでも *il y a* 文を用いることができるのだろうか？それとも X に対する発話者の意識によって、構文の選択に違いがあるのだろうか？

(1) について、あるインフォーマントは、学生が相手であれば抵抗はないが、敬意を表す必要がある相手の場合は必ず《Avez-vous...?》を用いると指摘した⁽¹⁰⁾。また、*il y a* を使うとリラックスした、あるいは親近感のある話し方だと感じられることがあるようだ。別のインフォーマントは、相手によって区別することはないが、*il y a* の方は理解されたかどうか、質問の有無だけが問題になり、avoir の方では、聴衆に反応を促す言い方だと感じられると指摘した。

(2) は、家族間の会話なら (2a), (2b) とともに用いることができるが、レストランでウェーターにたずねる場合は、相手を尊重し (2c) のように言うのが自然とのことであった。

(2) (Dans un restaurant, au serveur:)

c. Qu'est-ce que vous avez comme dessert?

(3) は父親に来客があるという場面についての発話である。聞き手(娘)も客に会うことを含意させたい場合、*il y a* を用いて、誰の来客かを言語化しないことがある。この場合 (3c) のように続けることができる。

(3) c. Il y a un invité ce soir. On dînera vers sept heures. Sois à l'heure!

一方、(3d) のように avoir を用いると、来客は《je》に会いにくるのだということが明示されるため、聞き手はアプリアリには来客と関係がないことになる。

(3) d. J'ai un invité ce soir. Profites-en pour aller au cinéma, si tu veux.

したがって、後続文脈がこうした含意に反するときは、(3e)のように〈mais〉で接続される。

- (3) e. J'ai un invité ce soir. Mais tu peux rester dîner avec nous, si tu veux.

以上の考察より、X を主題として Y を X と関係づけてとらえるか、X は文脈・発話状況から推測させ、Y の存在に意識を集中させるかが構文選択の基準になっていることがわかる。X に特に配慮するときには avoir が用いられ、Y の存在が X と関係づけられて提示される。一方、X と Y の関係よりも Y の存在を伝えることが主な目的であるときには il y a が用いられる。二つの言語形式は、近似的な価値をもつときでも、事態のとらえ方が異なると言える。

3. 認知構造

二つの言語形式は事態のとらえ方がどのように異なるのか？この点について考察を続けよう。

3.1 Y の認識空間

2 節では、言語外世界において Y が X と関係をもつことが文脈・発話状況から推測できる発話について考察した。しかし、本来 il y a Y 文では X が推測できないのが普通である。

- (19) a. *Il y a une voiture.
 b. ??Il y a une voiture bleue métallique.
 c. Il y a une voiture marron chez elle.
 d. A: Les voitures marron, ça n'existe pas.
 B: Si, si, il y en a une chez elle.
 e. (A la personne qui veut emprunter un quatre-quatre:)
 Si vous voulez visiter la Camargue, il y a un quatre-quatre chez mon voisin.

(19a, b) では文脈・発話状況が示されておらず、X を推測することはできない。容認度も非常に低い。(19c, d, e) では〈elle〉, 〈mon voisin〉は車の所有

者であるとは限らず、X を推測することはやはりできない。しかし発話は安定している。このような *il y a* 文は X を想定せずに Y の存在のみを提示する構文だと言える。

(20) では、X に相当するものが考えられないとき、*il y a* 文は成立するが、*avoir* 文は容認されないことを確認することができる。

(20) a. Il y a un centenaire chez mon voisin. Il fait sa petite promenade tous les matins. C'est incroyable!

b. *Mon voisin a un centenaire...

(20b) が非文になるのは、百歳の老人は友人、親兄弟などと違い、相関的な人間関係を含意しない語であるためだと考えられる。ここで表されているのは、Y の存在とその場所であって、《mon voisin》に所属する Y の存在ではない。

(5)-(7) のような発話も Y の所在、存在を表すが、発話者がなんらかの X を想定させようとしているとは考えられない。

(5) Il n'y a que nous pour organiser la fête.

(6) Il y a des enfants dans le parc.

(7) Il y a des centaines de chaumières dans le nord de Kyoto.

このように X が想定されないときは、*avoir* 文ではなく、*il y a* 文が用いられる。すなわち、Y が X に関係することを表すのではなく、Y の存在のみが表される。

こうした考察から、次の仮説を立てることができる。本来 *il y a* 文は、広く一般に Y が存在する、発話者と共発話者の共有する認識空間に、特定の X に関係づけられることなく存在することを表す。X が言語化されないのはこのためである。一方、*avoir* 文は Y が X との関係において存在することを表す。

このように *il y a* 文はデフォルトでは発話者と共発話者の共有する認識空間にさらに限定を加えることはない。このことは、*il y a* 文が《Vous cherchez Y?》のような Y の認識空間をほとんど限定しない問いに対する答えの文で容認されやすいことから確認できる。

(21) Vous cherchez un suisse roman? Il y en a un à mon université.

(22) Vous cherchez votre fils? Il est roux n'est-ce pas? Il y a un petit garçon roux dans le jardin.

(21), (22) の問いの発話では, Y の認識空間が限定されていない。答えの発話では, その限定されない認識空間を *il y a* で受け, そのうえで改めて *à mon université*, *dans le jardin* で Y の存在位置を示していると考えることができる。

(19d, e) もこうした発話である。「茶色の車」, 「四輪駆動車」の認識空間は問いの中では限定されていない。答えの発話では, その限定されていない認識空間で Y の位置づけを行っているのである。

こうした特性のため, *il y a* 文は, 認識空間を限定しなければ, あまりにも漠然とした発話になってしまうことがある。(19a, b) はそのような例である。(19c, d, e) のように場所を表す語句などによって限定を加えると, 安定する。

3.2 認知構造

以上の考察より, X avoir Y 文, *il y a* Y 文を用いるとき, 認識空間がどのように構築されるかを次のように考えることができる。(19b, c, f) を例に取り上げよう。

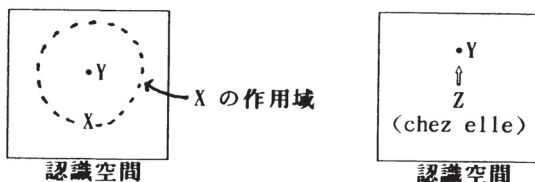
(19) b. ??*Il y a une voiture bleue métallique.*

c. *Il y a une voiture marron chez elle.*

f. *Elle a une voiture marron.*

発話者と共発話者の共有する認識空間に X (elle) が主題として導入され, X の作用域が設定される。Y (une voiture) はその作用域内に存在する, すなわち X と関係において存在する要素として認識される。このとき X avoir Y 文が用いられる (19f)。発話者と共発話者の共有する認識空間は, X の作用域が設定されることで限定される。一方, 発話者と共発話者の共有する認識空間が限定を受けず, Y の存在が認識されるときは *il y a* Y 文が用いられる (19b)。しかし, このままでは認識空間も限定を受けず, Y の存在位置も示されないため, 発話として不安定である。Y の存在位置 Z (chez elle) が示されると, 発話は安定する (19c)。

このような認識のあり方は次のように図示することができよう。



おわりに

発話者と共発話者の共有する認識空間は、言語活動の出発点においては何も限定を受けない白紙の状態にある。il y a Y 文は、デフォルトではこのような限定を受けない認識空間に要素を導入する言語形式である。このため、孤立文では極めて不安定である。しかし、場所などを表す語句を補うことにより、認識空間が限定されると発話は安定する。このような限定は言語表現によって加えられるとは限らず、文脈・発話状況によって加えられることもある⁽¹¹⁾。2節で考察した発話において X が推測可能であったのは、認識空間がこのような限定を受けるとき、X がたまたま推測可能になることがあるからだと考えられる。X avoir Y 文は、主題 X を導入して X の作用域を設定し、このような認識空間を限定する。このため、孤立文でも発話は安定する。

【注】

- (1) 本稿では時を表す前置詞句を構成する il y a は取り上げない。
- (2) (7) に対応する avoir 文として Kyoto a des centaines de chaumières dans le nord. が考えられるが、このような文がみられるのは京都について書かれた本など特殊なものに限られよう。
- (3) 本稿で分析する以下の発話は、筆者が作成し、4人のフランス人インフォーマントによる容認度の判定調査(5段階)を行ったものである。調査の度に修正を加えたため、発話によってはインフォーマント全員に判定を依頼できなかったものもある。こうした判定についてはその都度そのことを示した。
- (4) (8b) は、髪の一部が金髪だとするインフォーマントと、髪全体が金髪という解釈もあるとするインフォーマントがいた。また、髪全体について話すときは(8b)の不定冠詞を定冠詞にした J'ai les cheveux blonds. を好むと答えたインフォーマントが2人いた。なお、髪全体が金髪だということは《je》の属性を記述していることになり、髪が存在を記述するのとは意味的に異なる。日

本語でも、属性記述の場合は「金髪である」となり、「金髪がある」とは言わない。この問題については本稿では触れない。朝倉(1955)はこの二つの発話は構文が異なると述べている(p. 75)。

- (5) (10)-(12) は、《mes/ccs cheveux》など、X ではなく X の身体の一部を表す語句が先行文脈に出てくるという共通点がある。(10b) では《les cheveux》という語句は先行文脈にないが、《regarde》の潜在的目的語がこれに当たると考えられる。こうした点からも、発話者の意識はこの時点で X そのものではなく、その身体の一部に絞られていることがわかる。
- (6) (14b) は《Regarde mon visage》を《Regarde-moi》にすると容認度が低下すると指摘するインフォーマントがいた。
- (7) (10)-(12), (14b) と違い, (15b), (16b) では, 先行文脈に X の身体の一部を表す語句がない。すなわち, こうした語句はこれらの il y a 文が容認されるために不可欠の条件ではない。
- (8) 顔の一部が写った写真なら容認度が上がるが, これも il y a を用いると, 発話者の意識が人に向かわず, 髪やほくろに集中しやすくなるからであろう。
- (9) (9)-(16) でも, 《regarde》などの語句や発話状況を手掛かりにして X を推測することができる。
- (10) 《vous》を用いて相手の視点に立つことが相手を尊重することになる場合がある。道順の説明で Vous avez une chapellerie à droite. のように言うのは, このような vous の用法の一例である。
- (11) この仮説によれば, 伝統文法で行われているように il y a 文を存在文と提示文に分類する必要はなくなり, 統合的に説明できる。

【主要参考文献】

- 朝倉季雄(1955):『フランス文法事典』, 白水社。
- Charaudeau, P.(1992): Grammaire du sens et de l'expression, Hachette.
- 本多 啓(1994):「見えない自分, 言えない自分」, 『現代思想』, 22.
- Kawaguchi, J.(1991): AVOIR et les problèmes de la localisation en français, France Tosho.
- 国広哲弥(1995):「言語の認知的側面」, 『言語』14.
- Le Goffic, P.(1993): Grammaire de la phrase française, Hachette.
- 西村義樹(1996):「対照研究への認知言語学的アプローチ」, 『認知科学』, 3.
- Ruwet, N.(1990):《En et Y: deux clitics pronominaux anti-logophoriques》, Langages, 97.
- 佐々木正人(1993):「エコロジカル・セルフ」, 『言語』, 22.
- Wagner, R.(1964):《Il y a》, Le français dans le monde, 29.

(文学部非常勤講師)